

Hokkaido University News

北大時報

平成26年

9

No. 726 September 2014

札幌キャンパスを駆け抜ける —2014北海道マラソン—

お知らせ

・医療費通知事業の実施



1 国際研究拠点としての 更なる研究の飛躍を目指して

■ 全学ニュース

- 2 札幌キャンパスを駆け抜ける —2014北海道マラソン—
- 3 公益財団法人北海道大学クラーク記念財団への寄附
- 3 富岡 勉文部科学大臣政務官が本学を視察
- 4 平成26年度教員免許状更新講習を開催
- 5 平成26年度オープンキャンパスを開催
- 6 「北海道大学進学相談会」を東京で開催
- 7 北大フロンティア基金
- 8 北海道大学事務職員英語研修（海外派遣）報告会を実施
- 9 新渡戸カレッジ特別講演会を開催
- 10 国際連携研究教育局（GI-CoRE）人獣共通感染症グローバルステーションが国際シンポジウム：The First Symposium of the Consortium for the Control of Zoonosesを開催
- 11 国際連携研究教育局（GI-CoRE）量子医理工学グローバルステーションが第1回医学物理サマースクールを開催
- 12 留学生センター日本語研修コース修了式並びに同コース、日本語・日本文化研修コース（日研コース）及び北海道大学短期留学プログラム（HUSTEP）合同修了祝賀会を開催
- 13 日本語教授法ワークショップを開催
- 14 鮮度保持技術に関する意見交換会を開催
- 15 第1回新任教員向けキャンパスツアーを開催
- 16 人材育成本部上級人材育成ステーションS-cubicで「キャリアパス多様化支援セミナー（番外編）」を開催
- 17 人材育成本部上級人材育成ステーションS-cubicで「Advanced COSA（1）」を開催

■ 部局ニュース

- 18 水産科学研究院が美深町と包括連携協定を締結
- 18 総合博物館がむかわ町と相互協力協定を締結
- 19 公共政策大学院が「地方議員向けサマースクール」を開催
—地方自治体における公共施設の今後のあり方について討議—



2014北海道マラソン



平成26年度オープンキャンパス

- 20 北方生物圏フィールド科学センターで「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」を開催
- 24 北大農場公開デー「ジャガイモ収穫＆ポテトチップス作り」
- 25 法学研究科・附属高等法政教育研究センター公開講座「なぜ憲法改正なのか？」が終了
- 26 情報法政策学研究センターでサマーセミナー「最新の知的財産訴訟における実務的課題—特許法をめぐって—」を開催
- 26 北海道大学病院で第1回地域連携懇話会を開催
- 27 医学研究科・医学部で第27回教育ワークショップを開催
- 28 薬学研究院が「第4回薬学研究院研究発表会」を開催

■ お知らせ

- 29 医療費通知事業の実施

■ レクリエーション

- 30 学内教職員ソフトボール大会の開催

■ 学内規程 31

■ 研修

- 32 平成26年度国立大学法人北海道大学事務職員英語研修（グローバル化対応）
- 32 平成26年度法人文書管理・個人情報保護・情報公開に関する研修会

■ 表敬訪問 33

■ 人事 34

- 35 新任教授紹介

■ 訃報

- 36 名誉教授 石川 武 氏

公共政策大学院
「地方議員向けサマースクール」「ひらめき☆ときめきサイエンス」
（体験！ベリ—研究の最前線「君も育種家になろう！」）「ひらめき☆ときめきサイエンス」
（農地を改良する緑肥作物をみてみよう）北大農場公開デー
「ジャガイモ収穫＆ポテトチップス作り」

表紙：北方生物圏フィールド科学センター「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」(関連記事20頁に掲載)

裏表紙：北の鉄道風景¹⁸ 蒸留所のある街

国際研究拠点としての 更なる研究の飛躍を目指して

理事・副学長 かわばた 川端 かずしげ 和重



国立大学法人化において、本学は、この国が明治国家成立後に営々と築いてきた研究教育体制の劇的な転換期に立ち、国際社会を牽引するリーダー大学として、豊かな個性を活かし、その新たな機能を発揮する使命を負っています。

国際研究拠点

国立大学時代には全国の大学間で機能の均質化を図り、研究活動を横並びに推進することで、社会の発展に大きく貢献してきました。しかし、今、世界の大学や研究機関が国際社会を視野に入れた多様な観点で研究教育を展開する時代にあっては、国立大学法人として大学の個性化、言い換えれば、大学ごとの機能分化が求められます。すでに「ミッションの再定義」が実施され、大学の研究教育分野ごとに、国際研究教育拠点、全国分野特化研究教育拠点、地方研究教育拠点等のカテゴリー化が行われました。

本学は、研究に関して全学的に国際研究拠点としての飛躍を目指します。この観点から、個人の自由で独創的な発想に基づく多様な分野の先端研究を進めることと、同時に、その研究活動を個人レベルにとどまらず、日本さらには世界の学界や産業界等、社会を牽引するレベルまで高めることが重要な使命と考えます。このため、課題解決型研究を推進・支援するトップダウン型と、国際社会を牽引するレベルにまで個人的独創的研究を高めるボトムアップ型の推進・支援施策を講じます。本稿では、ボトムアップ型の主な施策について紹介します。

ボトムアップ型研究力強化

社会の中での大学の重要な機能として多様な先端的研究の推進が挙げられます。これを国際研究拠点として更に高めるために、外部資金等を活用して以下の施策を進めます。

1) 科学研究費ステップアップ事業：個人研究をレベルアップするために経費的支援と申請書作成支援を行います。2) 次世代型産学連携事業：組織型大型共同研究の誘致・推進を目的に、産業創出部門制度を新設し、さらに産学連携関係ポリシーの再構築を進めます。3) 若手人材育成事業：優秀な若手研究人材を積極的に獲得し、全学的観点でリーダー型育成を行うテニュアトラック制度を推進します。また、博士課程留学生を対象としたキャリアパス形成の支援策を実施します。4) 研究推進支援者（URA）事業：学内各部門と関係省庁との連携を進める取組や、全学的研究プロジェクトの企画を実施します。5) 研究情報の集約解析事業：学内の研究関連情報（研究テーマ、外部資金、論文情報、採用情報、人員構成、設備、施設等）の一元集約と解析を行います。

さらに、このような大学改革を推進する研究力強化施策については、部局等の意見はもちろんのこと、新たに設置した総長直轄の諮問委員会である次世代大学力強化推進会議（委員の半数は産業界・マスコミ界の経営者などの外部有識者）を通じて、社会の意見もしっかり取り入れながらグレードアップを図っていきます。

また、これらの施策情報は、関係するホームページやメールマガジン等によって随時提供します。特にURA事業では、学内の研究関連情報を、守秘等に十分配慮したうえで積極的に開示しますので、本学の研究状況を定量的に理解し、部局や個人の研究の新展開に資するべくご活用ください。施策は施策に過ぎず、研究者や部局執行部の皆さんによるご理解と活用によって、社会に大いに貢献する研究の飛躍的な発展が期待できると考えます。

■全学ニュース

札幌キャンパスを駆け抜ける —2014北海道マラソン—



夏日の中、総合博物館前を力走する選手

2014北海道マラソンが、8月31日（日）に札幌市内で開催され、男女約1万4千人*のランナーが本学札幌キャンパスを駆け抜けていきました。当日は昨年の変りやすい天候とは一転、晴れ渡る青空の下でのレースとなりました。

ランナーたちは、レース終盤の38km付近から本学構内に入り、北キャンパスから札幌農学校第2農場の側を駆け抜け、メインストリートの緑のトンネルを縦断中に40km地点を通過。クラーク像のあるロータリーを左折し、右手に見える緑鮮やかな中央ローンの木陰を通り、札幌農学校時代の正門を移設した南門を出て、北海道庁旧本庁舎（赤れんが庁舎）を正面に見な

がら、ゴールの大通公園を目指してラストスパートをかけていきました。

2009年大会からコースに加えられた本学の緑あふれる美しいキャンパスには、大勢の市民が駆けつけ、その温かい声援や激励、涼やかな景色が、ゴールまで残り約2kmの苦しい場面にある選手たちの最後の力走を後押ししました。

なお、本マラソンの様子は、UHB・北海道文化放送とBSフジで生中継されました。

※フルマラソンの参加者数

(総務企画部広報課)



男子優勝の辻 茂樹選手



女子優勝の野尻あずさ選手



緑のトンネルを駆け抜けるランナー



温かい声援や激励で迎える多くの方々

公益財団法人北海道大学クラーク記念財団への寄附

この度、公益財団法人北海道大学クラーク記念財団から、本年3月末をもって退職された方々から107万円のご寄附を賜った旨ご報告がありましたので、謹んでお知らせいたします。

同財団につきましては、毎年、本学の教育・研究及び学生支援のため、多額の助成事業を実施していただいております。本学といたしましても、この度のご厚志に対しあらためて感謝を申し上げます。

なお、ご芳名の掲載につきましては、ご本人の同意を得ておりますことを申し添えさせていただきます。

(総務企画部総務課)

寄附者の御芳名(8名)(平成26年8月31日現在、敬称略)

一色賢司, 木村正人, 清水 隆, 高橋孝行, 田中洋行, 中辻 隆, 藤本日出夫, 向井地博之

富岡 勉文部科学大臣政務官が本学を視察

8月21日(木)、富岡 勉文部科学大臣政務官が、科学技術に関する研究開発の動向把握を目的として、本学を視察されました。

同日午前到低温科学研究所に到着し、川端和重理事・副学長、村田直樹理事・事務局長及び江淵直人低温科学研究所長等の出迎えを受けた富岡政務官は、川端理事・副学長から、本学の研究活動について、次いで江淵低温科学研究所長から、同研究所の概要につ

いて説明を受けた後、南極氷床コアを -50°C で長期保存している超低温保存室等を視察されました。

続いて、生物機能分子研究開発プラットフォーム(動物実験施設)を視察され、先端生命科学研究院の綾部時芳教授から、研究内容の説明を受けるとともに、創薬エリア及び機能性食素材エリアの実験室をご覧になりました。

午後には、北方生物圏フィールド科

学センターにおいて、農学研究院の野口 伸教授から、農業のIT・ロボット化について説明を受けるとともに、第一農場に足を運び、無人で動くロボットトラクタを視察されました。

その後、北大病院陽子線治療センターを訪れ、医学研究科の白土博樹教授の案内で動体追跡陽子線治療装置を視察され、全行程を終了しました。

(総務企画部総務課)



富岡政務官(左)へ川端理事・副学長から研究活動紹介



低温科学研究所での江淵所長の説明



生物機能分子研究開発プラットフォーム実験室での綾部教授(先端生命科学研究院)の説明



第一農場での野口教授(農学研究院)によるロボットトラクタの説明



動体追跡陽子線治療装置前での富岡政務官と白土教授(医学研究科)

平成26年度教員免許状更新講習を開催

8月1日（金）から8月21日（木）にかけて、今年度の教員免許状更新講習を開催しました。

現在教員免許を持っている現職教員等は、10年ごとに設定される修了確認期限前の2年間に、大学などが開設する30時間の教員免許状更新講習（必修領域においては12時間、選択領域においては18時間）を受講・修了し、免許管理者（都道府県教育委員会）に申請する必要があります。本講習制度は、その時々で教員として必要な資質能力が保持されるよう定期的に最新の知識技能を身に付けることで、教員が自信と誇りを持って教壇に立ち、社会の尊敬と信頼を得ることを目指すために、平成21年4月1日に導入されました。

平成21年度以降、本学では毎年講習を開催しており、今年度も様々な学校種の教員等を対象として、全8講習を開催しました。受講者の夏休み期間を中心に開催したことや、バラエティに富んだ内容の講習を開設したこともあり、必修領域の受講者数は154名、選択領域の受講者数は6講習あわせて219名の方々の参加がありました。



「南紀熊野における森林実習」の様子

講習では、担当講師からのオリエンテーションの後、各テーマに関する講義や実習が行われ、講習のまとめとして修了認定試験を行いました。講習後に寄せられたアンケートでは、「それぞれの講義が大変興味深く、有意義であった」、「新たな視点、考えるヒントを得ることができた」、「日本の工学技術レベルの水準の高さを知る機会が得られてよかった」などの意見があったほか、実習を主とする講習の受

講者からは、「体験を通して知ったこともあり、授業にも生かせそうだ」、「この経験を高校生に何とか伝えられたらと思う」などの意見が寄せられ、本講習の意義を改めて感じる良い機会となりました。

なお、今年度開催した講習は以下のとおりです。受講者の皆様、大変お疲れ様でした。

（学務部学務企画課）

今年度で開催した講習

領域	講習名	開設日	講習時間	定員	受講者数
必修	教育の今日的課題とその改革の方途(W103)	8/12・13	12時間	80人	77人
	教育の今日的課題とその改革の方途(W203)	8/12・13	12時間	80人	77人
選択	特別支援教育	8/14	6時間	120人	114人
	歴史と文化	8/1	6時間	50人	41人
	倫理思想の根本問題	8/12	6時間	50人	19人
	理系の応用技術：工学の世界	8/5	6時間	80人	26人
	南紀熊野における森林実習	8/19～8/21	18時間	12人	11人
	練習船による水産科学実習	8/4～8/6	18時間	8人	8人

平成26年度オープンキャンパスを開催



来場者で賑わう中央食堂前



教育学部「自由参加プログラム」



理学部「自由参加プログラム」

8月3日(日)・4日(月)の2日間、札幌・函館の両キャンパスにおいてオープンキャンパスを開催しました。(一部の学部・学科によるプログラムは別の日時に開催)

期間中の延べ来場者数は昨年度を34人上回る11,427人となり、過去最高を

記録しました。

主に3日(日)に開催した「自由参加プログラム」には、高校生だけでなく、多くの保護者や市民の方々が訪れ、学部・学科紹介や研究室訪問に参加しました。

また、11の学部等では実験や体験ゼ

ミ等による「高校生限定プログラム」を主に4日(月)に開催し、参加した高校生にとっては大学における学びの一端を味わう貴重な機会となりました。

(アドミッションセンター)

来場者数

	自由参加プログラム	高校生限定プログラム	部局等別合計
文学部	753	96	849
教育学部	343	107	450
法学部	830		830
経済学部	468	152	620
理学部	2,154	105	2,259
医学部医学科	515	84	599
医学部保健学科	872		872
歯学部	75	33	108
薬学部	959		959
工学部	1,059	224	1,283
農学部	679	151	830
獣医学部	632	55	687
水産学部	393	19	412
環境科学院	61		61
附属図書館(本館・北図書館)	142		142
国際本部	96		96
アドミッションセンター 新渡戸カレッジオフィス 特別修学支援室	330		330
高等教育推進機構		40	40
総計(人)	10,361	1,066	11,427

「北海道大学進学相談会」を東京で開催

本学単独主催の大学進学希望者向け「北海道大学進学相談会」を8月23日（土）に東京で開催しました。

本相談会は平成19年度に東京で初開催して以降、今年度で8度目の開催となりますが、高等学校等の希望をふまえ、開催時期をこれまでの11月から、試行的に8月に移し開催しました。

各会場では山口佳三総長、新田孝彦理事・副学長をはじめ、各学部やアドミッションセンターの教職員、在学生

等、合わせて約70名が高校生等やその保護者への説明・相談に当たりました。

当日は、総長挨拶を皮切りに、全体説明として新田理事・副学長が本学の魅力について説明を行い、その後、喜多村昇アドミッションセンター副センター長による総合入試についての説明、山口淳二新渡戸カレッジ副校長による新渡戸カレッジについての説明等を行いました。また、それと並行し

て、全12学部のブースや、学生支援相談ブース等において個別相談対応を行い、多くの高校生・保護者等がブースを訪れていました。

来場者数は891名で昨年度並みとなりました。

この後、10月25日（土）に名古屋で、翌26日（日）に大阪で、進学相談会を開催します。

（アドミッションセンター）



全体説明で挨拶する山口総長



総長・副学長と話そうコーナーで対応する山口総長と新田理事・副学長



来場者で賑やかな会場内



個別相談ブースで対応する山口新渡戸カレッジ副校長



入試・総合相談



北大生と話そうコーナー

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動することとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報	16,259件 2,889,027,929円
基金累計額（8月31日現在）	教職員の寄附率 33.4%（1,310件／3,921人）

8月のご寄附状況

法人等3社、個人146名の方々から16,137,460円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいているの方々のご芳名、総合博物館への銘板の掲示について掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

株式会社アークス、大塚ホールディングス株式会社、北大野球部OB会

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	浅野 賢二	石井 孝久	石川 雅久	石黒 信久	石部 祐子	伊藤 義之	井上 猛
入澤 秀次	内山 喬一	遠藤 良治	大嶋 邦廉	小内 透	小原 大和	埴山 雅秀	景浦 暁
風間 敏光	加藤 敏明	金川 眞行	鎌田 信悦	河本 充司	菊地 憲男	岸田 勝己	北川まゆみ
北澤 馨	木下 智樹	久住 一郎	工藤 峰生	桑島 宏明	小島 尚三	児島 仁	小林 良清
斉藤 久	坂岡 博	桜井 謙介	笹本 洋一	佐藤慎一郎	佐藤 泰男	佐藤 嘉晃	篠原 信雄
清水 智之	下倉 明	須田 孝徳	瀬名波栄潤	高島 章生	高瀬 愛	高橋 国広	高橋 正三
高橋 光彦	田中 潔	田中 啓之	丹田 勝敏	丹野千枝美	茅野 純	辻 彼南雄	土家 琢磨
寺澤 睦	豊田 健一	豊田 威信	中江陽一郎	中野 修	中村 雅仁	西川 秀司	西野 徹
西部 学	長谷川 脩	林 裕子	原 純	原 猛機	平岡 満里	平川 明久	備仲 健之
福原 正和	藤崎 和夫	古田 康	松本 直秀	水谷 洋一	宮城島拓人	山内 隆嗣	山崎 賢司
山本 有平	横田 秀章	吉田 広志	脇川 康夫				

銘板の掲示（20万円以上のご寄附）

（法人等）

大塚ホールディングス株式会社

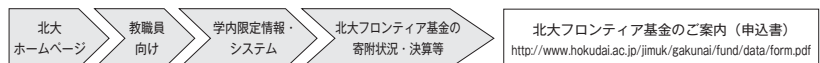
（個人）

小林 良清、平岡 満里

ご寄附のお申し込み方法

① 給与からの引き落とし

申込書は、本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし、ご記入の上基金事務室に提出してください。



② 郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡します。

③ 現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は、本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか、各部署事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので、ご利用ください。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室（事務局・学内電話 2017）

（総務企画部広報課）

北海道大学事務職員英語研修（海外派遣） 報告会を実施



報告会風景

総務企画部人事課では、平成25年度から開始した「北海道大学事務職員英語研修（海外派遣）」の派遣者2名による報告会を7月31日（木）に附属図書館大会議室において実施しました。

本報告会は、全て英語により行われ、平成26年度北海道大学事務職員英語研修（上級）の最終日に行われるプレゼンテーションの実習と合同で、ブリティッシュ・カウンシルの講師の司会のもと開催されました。

報告を行ったのは、カナダ・アル

バータ大学へ派遣された学務部教育推進課の橘明日香係員と、ニュージーランド・オークランド大学へ派遣され、現在、文部科学省の国際教育交流担当職員長期研修プログラムで文部科学省にて研修中（派遣時は薬学事務部）の菅原由紀子係員の2名で、それぞれ、派遣先における受講状況や、周辺環境、生活習慣の違いなどを、海外で実践してきた英語力を駆使して報告を行いました。

報告会には英語研修（上級）受講者

のほか、本研修による今年度の派遣予定者2名や、国際交流や本研修に関心のある職員が多数聴講し、流暢な英語に感心しながら興味深く聞き入っている様子でした。

なお、本報告会は来年度以降についても引き続き実施し、今年度から実施する「北海道大学事務職員海外インターンシップ」受講者の報告会も併せて行う予定です。

（総務企画部人事課）



橘係員



菅原係員

新渡戸カレッジ特別講演会を開催

新渡戸カレッジでは、人材育成プログラムの一環として、国際舞台で活躍されている方を講師としてお招きし、特別講演会「グローバル化の中の日本人」を7月24日（木）・25日（金）の2日間にわたり開催しました。

1日目は前国際連合広報担当事務次長で公益財団法人フォーリン・プレスセンター理事長の赤阪清隆氏より、「グローバルに活躍するための極意」とのテーマでご講演いただきました。赤阪氏は人口が減り経済成長が伸び悩む日本の将来は決して楽観視できず課題が深刻化していること、グローバルに活躍する日本人が増えれば世界で影響力のある存在であり続けられるが、国際機関で働く日本人があまりにも少ないこと、どうしたら世界の競争相手と伍して戦えるのか、グローバル人材育成のための取り組みやグローバル人材になるための秘訣等について、さまざまなデータを示し、わかりやすくお話されました。

続いて、OECD東京センター所長の村上由美子氏より「OECDの国際比較統計から見る日本人論」とのテーマでご講演いただきました。村上氏はOECDの国際成人力調査の概要とその結果を紹介し、日本人の特徴を国際比較という観点から論じ、ご自身のキャリア経験からグローバル社会で活躍できる人材に求められている資質は何か、

どのようなマインドを持つべきなのかといった問題についてお話されました。会場内を活発に動き回り、データからどういったことが読み取れるかを聴衆の皆様に関わりながら熱く語られ、国際ビジネスや国際機関などで就職を考えている人にとってキャリアのヒントを得られる講演となりました。

2日目はこの特別講演会のコーディネーターを務められた文部科学省参与で武田アンド・アソシエーツ代表の武田修三郎氏より「未来への懸け橋の君たちへ」とのテーマでご講演いただきました。武田氏は、大学で学ぶことの意義や日本及び世界が直面している課題を示し、未来を担う若者たちの役割は各人が生涯をかけてグローバルイノベーションと呼ばれる新しい文明に橋をかけることであり、札幌農学校を卒業した新渡戸稲造が「太平洋の橋になる」と述べて実行したように、多くの困難を伴っても必ずやり遂げてもらいたいし、またそう信じているとエールを送りました。

両日も授業時間と重なる時間帯ではありましたが、参加者からは日本語だけでなく英語での質問もあり、また講演終了後に熱心に質問する人の姿も見受けられ、テーマへの関心の高さがうかがえました。

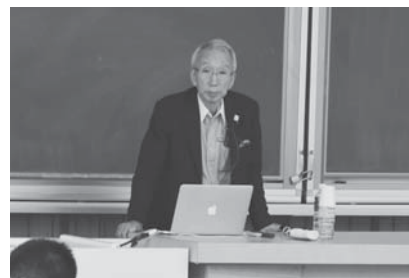
（学務部教育推進課）



講演する赤阪氏

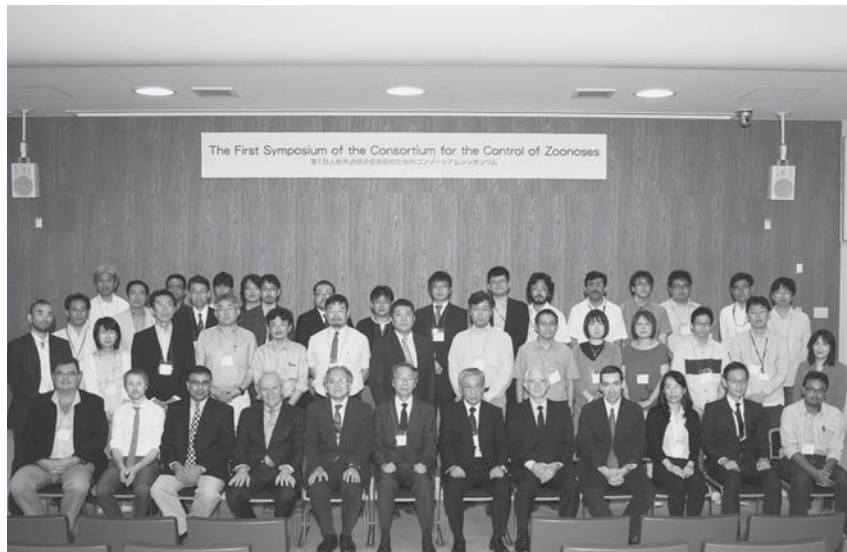


講演する村上氏



講演する武田氏

国際連携研究教育局（GI-CoRE）人獣共通感染症グローバルステーションが国際シンポジウム：The First Symposium of the Consortium for the Control of Zoonosesを開催



参加者記念撮影

本年4月、本学は、海外から世界トップレベルの研究ユニットを誘致し、国際連携研究・教育を推進するための教員組織として、国際連携研究教育局（GI-CoRE）を設置しました。人獣共通感染症グローバルステーションでは、メルボルン大学、アイルランド国立大学ダブリン校、アブドラ国王科学技術大学からそれぞれ研究ユニットを誘致し、本学を含めた4大学で、人獣共通感染症の研究教育を推進するためのコンソーシアム（Consortium for the Control of Zoonoses）を形成し、人獣共通感染症克服のための研究協力を推進しています。

GI-CoRE人獣共通感染症グローバルステーションは、8月29日（金）に、本学獣医学研究科の講堂でThe First Symposium of the Consortium for the Control of Zoonosesを開催しました。

本シンポジウムにおいては、人獣共

通感染症グローバルステーションの教員（喜田 宏教授、杉本千尋教授、澤洋文教授、山岸潤也准教授）、及び各ユニットの外国人研究者（メルボルン大学ユニットのDavid C. Jackson教授、Brendon Y.L. Chua博士、アイルランド国立大学ダブリン校ユニットのWilliam W. Hall教授、Michael J. Carr博士、アブドラ国王科学技術大学ユニットのArnab Pain准教授、Richard L. Culleton准教授）が現在の研究成果と今後の研究計画について発表しました。

本シンポジウムには、以上の発表者10名に加え、教職員43名、学生52名、来賓13名、合計118名が参加し、活発な質疑応答が行われました。本シンポジウム及び翌日開催された研究推進会議において、国際研究教育ネットワークを活用し、人獣共通感染症の克服を目指した基礎、応用、臨床研究を強力



発表風景

に推進することを目的として、人獣共通感染症の診断、予防と治療のための基礎研究並びに、診断キット、ワクチン及び治療薬の開発、モデル動物を用いた原虫病の病態解析、臨床検体を用いた人獣共通感染症の疫学研究及び開発した診断、治療法の臨床応用等の研究計画が提案され、研究の推進計画について4大学間で意思の統一が図られました。

（国際連携研究教育局）

国際連携研究教育局（GI-CoRE）量子医理工学グローバルステーションが第1回医学物理サマースクールを開催

GI-CoRE量子医理工学グローバルステーションでは、スタンフォード大学放射線腫瘍学科と共同で8月18日（月）から22日（金）までの一週間にわたり、医学研究科中棟にて「GI-CoRE医学物理サマースクール」を開催しました。

本サマースクールは、新大学院創設を見据えた量子医理工分野での教育への貢献を目指すとともに、本学が構想中である海外の一流研究者を招いて実施するサマーインスティテュートのパイロット的なプログラムとして開催が

決定されたものです。

スタンフォード大学、放射線医学総合研究所、及び本学からなる多彩な講師陣を迎え、受講者としては、ベトナム国立フエ中央病院がんセンター、京都大学、東北大学、都島放射線クリニック、本学等から医学物理士、大学院生等14名を受け入れました。

セミナーは英語による講義のみならず、全国各地の現場で活躍する医学物理士とのフリーディスカッション、放射線や陽子線装置を使った実習（臨床研修）を含む包括的なコース内容と

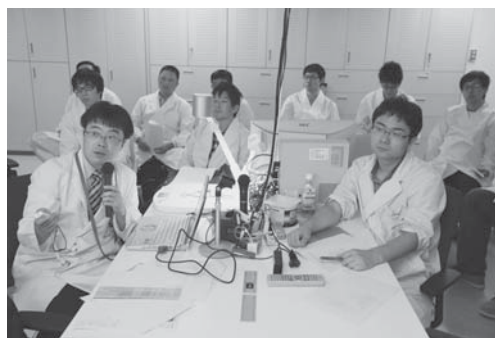
なっており、受講者の方々からも講習内容の充実が大変高く評価されるとともに、来年度以降の開催も是非期待したいという内容のフィードバックがありました。

最終日には量子医理工学グローバルステーションに所属する工学研究院梅垣菊男教授から修了証が各受講者に手交され、盛会裡に終了しました。

（国際連携研究教育局）



スタンフォード大学Lei Xing教授による講義



放射線QA実習の様子

留学生センター日本語研修コース修了式並びに同コース、日本語・日本文化研修コース（日研コース）及び北海道大学短期留学プログラム（HUSTEP）合同修了祝賀会を開催



修了証書を受け取る学生

国際本部留学生センター日本語研修コース研修生の修了式を、8月8日（金）午後4時30分から国際本部大会議室において行いました。

この日本語研修コースは、大使館推薦の国費外国人留学生に対して大学院進学前の予備教育として開設されている6か月間の研修コースで、今回修了した研修生は、本年4月に入学した14か国からの16名です。10月からは、13名が本学の研究科等で、2名が帯広畜産大学で、1名が小樽商科大学で引き続き学ぶことになっています。

修了式では、留学生センター教員や指導教員が見守るなか、上田一郎国際本部長から留学生一人ひとりに修了証書が授与されました。

続いて、杉浦秀一留学生センター長より日本語でお祝いの言葉があり、学生は6か月間日本語を学んだ成果を生かして、日本語のスピーチを聞きとろうと真剣に聞き入っていました。

最後に集合写真を撮影しましたが、その後もしばらく学生たちは、指導教員やこの半年間で親しくなった学生同士で、お互いに写真撮影を続けていました。

修了式に引き続き、午後5時から、同コースのほか、昨年10月に入学した日本語・日本文化研修コース（日研コース）と北海道大学短期留学プログラム（HUSTEP）の合同修了祝賀会が開かれ、留学生センター教員や指導教員も併せて約120名が出席しました。

日研コースは、母国で日本語・日本文化に関する教育を行う学部在籍している協定校の留学生に対して日本語、日本文化、日本事情に関する教育を行う1年間の研修コース、HUSTEPは、本学の協定校に在籍する学生に対して原則として英語による授業を実施するプログラムです。各コース等から参加した学生数は、日研生36名、HUSTEP生52名でした。

祝賀会は、杉浦留学生センター長の発声による乾杯で始まり、修了生たちは、学生同士はもちろん、お世話になった先生方とも語らい、楽しい時を過ごしていました。

途中、各コース等の代表者が、すっかり上達した日本語のスピーチで日本語の勉強や本学での楽しかった学生生活の思い出などについて語り、祝賀会を盛り上げました。



集合写真（日本語研修コース）



祝賀会でのHUSTEP学生代表挨拶

最後に留学生センターの小林由子教授からお祝いの言葉があり、祝賀会が終了しました。終了後も、多くの学生がラウンジに残り、名残惜しそうに歓談したり、写真撮影をしたりしていました。

（国際本部国際教務課）

日本語教授法ワークショップを開催



集合写真

7月28日（月）から8月1日（金）までの5日間、国際本部留学生センターにおいて、日本語教授法ワークショップを開催しました。

この催しは、本学と大学間交流協定を締結している協定校で日本語教育に携わっている先生方をお招きし、協定校における日本語教育をより一層充実したものにするためのお手伝いをするとともに、協定校の日本語教員と本学留学生センターの日本語教員の交流を図ることを目的に開催しています。平成20年にスタートした本ワークショップも、本年度で7度目の開催となり、今回は、中国、韓国、タイ、ロシアそしてベルギーの協定校より、11名の先生方が参加しました。

初日の開講式では、杉浦秀一留学生センター長から歓迎のメッセージがありました。留学生センター教員及び参加者が自己紹介をする際には、各々の

指導環境などについての簡単な報告もあり、参加者は熱心に聞いていました。その後行われた交歓会でも、留学生センターの教員と参加者は、互いの経験や状況などの情報交換をしながら親交を深めました。

2日目からのワークショップでは、留学生センターの3名の教員による、「日本語音声教育の新たな取り組み」、「読解授業の考え方と作り方」、「各大学における日本語のコース・デザインの共有」という講義や、参加者の発表、授業見学が行われました。参加者からは「今後の授業で活用したい」、「有意義に過ごすことができた」、などの感想がありました。

また、期間中、講義や課外行事を通して、留学生センターの教員と参加者の間で活発な意見交換や情報交換が行われました。その他、学内ツアーや市内ツアーでは、参加者は本学や近隣の



グループワーク（ワークショップ2日目：読解授業の考え方と作り方）



授業見学の様子

施設、札幌における留学生の住環境などについて熱心に見学し、自校の学生に本学への留学を安心して勧めることができると感じたようです。すでに本学に留学している学生と会い、こちらでの実際の生活・学習環境についてヒアリングをされた先生もいました。

最終日の閉講式では、山下好孝留学生センター教授より総括があった後、個々に修了証書が手渡されました。各々が今回得たワークショップでの成果を自校に戻って活用したいと述べ、また、これからの互いの交流を約束し、ワークショップは好評のうちに終了しました。

この催しは来年度以降も引き続き開催していく予定です。

（国際本部国際教務課）

鮮度保持技術に関する意見交換会を開催



会場の様子



総合討論

8月1日（金）、工学研究院フロンティア応用科学研究棟において、産学連携本部主催の「鮮度保持技術に関する意見交換会」を開催しました。

本意見交換会は、本学の工学研究院、農学研究院、水産科学研究院、さらには産業界から株式会社前川製作所等、75名もの産と学の研究者が集結し、「鮮度保持技術」をテーマに相互理解を深めるとともに、分野横断的なプロジェクトの形成を目指して活動しています。

はじめに工学研究院の濱田靖弘教授より「北海道における地域エネルギー資源の有効利用」と題し、自然の冷熱利用について発表の後、同研究院の内田 努准教授は「生物の中の水を制御

する」と題し、細胞の凍結保存に関する技術や課題について紹介を行いました。次に農学研究院の川村周三教授より「農畜産物の鮮度保持・品質保持技術の現状と課題」と題し、米・ジャガイモ・にんじん・牛乳・青果物・ナッツ・大麦など、農作物ごとに異なる鮮度保持技術や課題について発表がありました。続いて水産科学研究院の今野久仁彦教授は「鮮度、古くて最先端の水産の品質指標」と題し、「鮮度」にも様々なとらえ方があることや、魚種によって全く異なること等を発表しました。最後に株式会社前川製作所企業化推進機構の篠崎 聡次長より「農水産物の鮮度保持技術と海外輸出に向けた課題について」と題し、冷凍・冷蔵

保存と評価技術に関する取り組み事例や技術課題等について発表いただきました。

総合討論では産学連携本部の木曾良信部門長がコーディネーターとして意見交換を行い、会場からも活発な意見や質問がありました。

本意見交換会の事務局は産学連携本部が担っており、今後も継続して開催しますので、興味のある研究者の方には是非ご参加いただきたいと思っています。ご不明な点やご質問など、お気軽にお問い合わせください。

◆連絡先：jigyo@mcip.hokudai.ac.jp

（産学連携本部）



工学研究院 濱田教授



工学研究院 内田准教授



農学研究院 川村教授



水産科学研究院 今野教授



株式会社前川製作所 篠崎次長

第1回新任教員向けキャンパスツアーを開催

本学に採用されて5年以内の教員（以下、新任教員）を対象とした学内リソース紹介研修を8月21日（木）にキャンパスツアー形式で行いました。

この学内リソース紹介研修は、本学の新任教員が教育に関して活用できる本学のリソースに関する情報や本学の学生等に関するデータを集中的に収集できる機会として、今年度初めて実施したものです。今回は座学だけではなく、新任教員が実際に設備を体験するキャンパスツアーの形式で行い、新任教員29名が参加しました。

まず初めに、新田孝彦理事・副学長の挨拶に始まり、「北海道大学の倫理綱領」についての講義があり、「教員の資質を高めるためには、外的要因への対応を通じて見識を深めることが必要」といった説明がありました。

次に「附属図書館本館ツアー～学習支援の視点から～」では、附属図書館利用支援課の野中雄司係長による附属

図書館の概要説明の後、参加者は5グループに分かれ、図書館員の案内のもと館内見学を行いました。見学の間には「附属図書館の学習支援」などについて説明があり、具体的な活用方法について質問する参加者もいました。

さらに情報基盤センター南館において、情報基盤センターの重田勝介准教授による講義「北大の教育情報システムについて」では教育情報システムの説明があり、参加者は実際に操作をしながら説明内容の確認を行いました。また、高等教育推進機構IRネットワーク推進室の徳井美智代特任准教授による講義「IRの取組み～データから見える北大生の特徴～」ではIR事業の紹介及び平成25年の調査結果から本学の特徴的な項目についての説明がありました。

続いて会場を高等教育推進機構に移し、「アカデミック・サポートセンターによる学生支援」という趣旨で同

センターの多田康紘特定専門職員による説明があり、悩んでいる学生に対してセンターを積極的に紹介してほしいとの依頼がありました。最後に情報教育館において、高等教育推進機構総合教育部長の鈴木久男教授による講義「北大の全学教育と総合入試」で全学教育及び総合入試についての詳細な説明があり、産学連携本部イノベーション部創造的知財創出部門長・産学連携法務室長の寺内伊久郎特任教授による講義「北大教員が知っておくべき知財制度と学内ルールのポイント」では特許の基礎から知的財産に関する注意事項についての詳細な説明が行われました。

新任教員は積極的に参加し、プログラムそれぞれに関して様々な質問が挙がり、関心の高さがうかがえました。

（高等教育推進機構）



教育情報システム操作の様子



附属図書館本館ツアーの様子

人材育成本部上級人材育成ステーションS-cubicで 「キャリアパス多様化支援セミナー（番外編）」を開催



聴講風景

人材育成本部のS-cubicでは、6月6日（金）に学术交流会館にて「キャリアパス多様化支援セミナー（番外編）」を開催しました。

キャリアパス多様化支援セミナーとは、若手研究者のキャリアパスの多様化について考えるプログラムです。博士のキャリア選択の多様性について、本セミナー及び企業研究所視察等のプログラムにより、具体的に体験的に学びます。特に番外編は理工系大学院生が自分の置かれている社会的立場を理解し、キャリア選択の重要性を認識して自己分析を行い、研究開発といった分野以外でも活躍の場のあることを認識します。

今回の番外編（単位認定外）では、「企業の研究開発と知的財産権：理工系のキャリアとしての知財マン」と題し、企業からは大日本印刷株式会社知的財産本部・関西知的財産部の吉村裕子氏、サントリー食品インターナショナル株式会社知的財産部の青木美和氏、シスメックス株式会社知的財産部長の井上二三夫氏の、3名の現役知財マンやウーマンの方々にご自身の経験や若手研究者に期待することについてご講演いただきました。

若手研究者の参加者は74名で、前期

番外編で単位認定対象外にも関わらず、多くの参加がありました。

開催後のアンケートでも、「知的財産権の重要性が分かり、研究活動には必要不可欠であることを学びました」「技術者と知財の人間が想像していたよりも密接にコンタクトしているということ、モノづくりではなく知的な財産を作る時代に変化しているということについてよく理解した」「思っていた以上に理系学生の持つポテンシャルを知財での仕事に具体的に活かしていくことが出来ることを知りました」との嬉しいコメントを数多くいただきました。

人材育成本部では以上の活動に加えて、赤い糸会、Advanced COSA、キャリアマネジメントセミナー、企業での長期インターンシップ等を通して、これまで以上に若手研究者の実践力を高める事業に注力していきますので、今後ともご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

なお、興味のある方は人材育成本部のホームページを是非ご覧ください。

◆<http://www2.synfoster.hokudai.ac.jp>

（人材育成本部）



大日本印刷株式会社 吉村氏



サントリー食品インターナショナル株式会社 青木氏



シスメックス株式会社 井上氏



樋口直樹特任教授による
人材育成本部の活動紹介



産学連携本部 寺内伊久郎特任教授

人材育成本部上級人材育成ステーションS-cubicで 「Advanced COSA（1）」を開催



聴講風景

人材育成本部・上級人材育成ステーションのS-cubicでは、8月7日（木）・8日（金）に学术交流会館にて「Advanced COSA（1）」を開催しました。

Advanced COSAとは、科学者のための科学経営コース（Advanced COSA: Course of Science Administration）の略称であり、企業の第一線で活躍する研究所長や部長級の方を講師としてお招きし、大学院博士課程における教育や研究経験が、企業における研究や事業活動においてどのように活かされているのか、また現在の企業が博士に対して何を期待しているのか等、事例を交えて講義していただいています。

お招きしている講師は、基礎科学を学んだ研究者が就職し、活躍している企業において研究や事業の第一線を経験し、現在も企業研究のあり方や基礎研究の進め方と事業の方向性等の課題について日々取り組まれている方々です。また、平成20年度からは企業研究を身近に感じてもらうため、若手～中堅研究者も講師としてお招きしています。

この講義を通して、大学院生が、企業での活動はもとより、アカデミアでの活動においても参考となる企業研究の現状について理解を深め、社会における基礎科学の重要性を認識し、視野を拡大することを目指します。

今回のAdvanced COSA（1）では、旭化成ケミカルズ株式会社理事・樹脂総合研究所前所長の七澤 淳氏、総合

商社からは初めての、丸紅株式会社ICTサービスビジネス部長の大橋一登氏、大塚製薬株式会社生産技術部（栄養製品担当）部長の半谷いづみ氏、若手研究者としてパナソニック株式会社エコソリューションズ社のジョン ウィンソン氏（本学農学院博士課程・平成23年修了）の4名の方々に企業での研究概要に続き、ご自身の経験や若手研究者に期待することについてご講演いただきました。

博士研究員や大学院博士課程学生の参加は2日間で延べ194名となり、数多くの学生が熱心に聴講していました。

開催後の参加者のアンケートでも、「自分たちの専攻学問とは異なる分野で働く方のお話を聞くことにより、異なる視点から働くことについて学ぶことができた」「モノづくりの現場の様子がより具体的にイメージできるようになった」との嬉しいコメントが数多く寄せられました。

人材育成本部では以上の活動に加えて、赤い糸会、キャリアパス多様化支援セミナー、企業での長期インターンシップ等を通して、これまで以上に博士研究員や大学院生の実践力を高める事業に注力していきますので、今後ともご理解とご協力をよろしくお願い申し上げます。

なお、興味のある方は人材育成本部のホームページを是非ご覧ください。

◆<http://www2.synfoster.hokudai.ac.jp>

（人材育成本部）



旭化成ケミカルズ株式会社 七澤氏



丸紅株式会社 大橋氏



大塚製薬株式会社 半谷氏



パナソニック株式会社 ジョン氏



質疑応答

■ 部局ニュース

水産科学研究院が美深町と包括連携協定を締結



協定書を取り交わす山口美深町長（左）と安井研究院長

水産科学研究院では、8月18日（月）に美深町と包括連携協定を締結しました。

美深町と本研究院との交流は、平成20年に美深町からの要請を受け、足立伸次教授がチョウザメ繁殖指導を行ったことから始まり、平成21年度以降は足立教授がチョウザメ繁殖指導をするだけでなく、美深町から本研究院に研究材料としてチョウザメ生殖腺組織が提供され、多くの修士論文・卒業論文の成果が出されました。

平成24年度以降からは、都木靖彰教授がチョウザメが持つコラーゲンの活用による北海道水産資源の6次産業化に関する研究を展開し、地域振興への取り組みが進められています。

美深町において行われた協定調印式後には、旧恩根内小学校のプールを活用したチョウザメ養殖場において、同養殖場の完成式典が行われました。式典では安井 肇研究院長から「水質の良い地下水をふんだんに使用した未利用施設を活用し、今までよりおいしい



チョウザメ養殖場完成式典の様子

チョウザメの生産が可能になり、新しい食文化創造に役立つ」との挨拶があり、山口信夫美深町長からは「産学官の連携で、チョウザメ事業の産業化を進めたい」と期待の言葉が述べられました。

今回の協定締結により、本研究院としても美深町の施設や自然環境内での学生実習・実験が容易となることなども含め、学術・教育・文化及び地域振興に関する各分野において協力し、相互に発展充実していくことを期待しています。

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部）

総合博物館がむかわ町と相互協力協定を締結

総合博物館では、9月1日（月）に胆振管内勇払郡むかわ町と相互協力協定を締結しました。当日は、むかわ町から竹中喜之町長、金本和弘教育振興室長、当館からは津曲敏郎館長、小林快次准教授他、教職員が出席しました。

今回の相互協力協定は、平成15年にむかわ町穂別在住の堀田良幸氏によって発見され、平成25年に総合博物館とむかわ町立穂別博物館による第一次発掘が行われた恐竜化石の発掘を継続し、研究を進め、活用を図るにあたり、総合博物館とむかわ町がこれまでに以上に連携を強化することを目的に締結したものです。

今後はむかわ町における恐竜発掘のみならず、各方面における連携や協力の具体的な形態について別途協議を進め、相互の発展を目指していきます。

（総合博物館）



左から、小林准教授、津曲館長、竹中町長、金本教育振興室長



調印後、握手を交わす竹中町長（右）と津曲館長

公共政策大学院が「地方議員向けサマースクール」を開催 —地方自治体における公共施設の今後のあり方について討議—



講義風景

公共政策大学院（公共政策学教育部・公共政策学連携研究部）では、8月20日（水）・21日（木）の2日間、社会貢献活動の一環として「地方議員向けサマースクール」を開催しました。

このスクールは、地方分権改革が進む中、今後ますます重要な役割を果たすことになる地方議会の活性化と議員の自己啓発・自己研鑽に資することを目的に、大学院が単独で取り組むものとしては全国初の試みとして平成20年にスタートしたものです。第7回目となる今年、人口減少が進む中の地方自治体にとって不可欠な取り組みである「公共施設マネジメント」をテーマとして取り上げ、北海道内の市町村議会議員はもとより道外の市議会議員なども含め50名と多くの受講者が参加しました。

まず1日目の20日には、本大学院の石井吉春教授から「北海道内の自治体における公共施設マネジメントの意義」、滝川市公共施設マネジメント課の浦川学央課長から「滝川市における公共施設マネジメントの取組」、釧路

公立大学の佐野修久教授から「釧路市における公共施設マネジメントの取組」と題して、それぞれ講義や事例紹介を行いました。次いで2日目の21日には、公共施設マネジメントに関して、愛知県高浜市の公共施設マネジメント白書等の事例をもとに、3つのグループに分かれて討議を行いました。具体的には、①高浜市が公共施設マネジメントに取り組んだ背景とその主な内容・特色を整理した上での期待される効果と今後の課題・問題点の検討、②自分が関係する自治体において公共施設の今後のあり方を検討する場合の望ましい進め方、その際の留意事項や解決すべき課題の検討、③自分が関係する自治体において公共施設の今後のあり方を検討する場合に議会として、または一人の議員としてどのように関わるべきかの検討という3つの項目について、受講者各自の市町村における状況などを踏まえて、熱心な議論が交わされました。討議後は、全体でグループ討議の結果発表と意見交換を行いました。

受講者からのアンケートでもおおむ



グループ討議



全体討議での結果発表



全体討議での意見交換

ね高い評価を受けており、地方議員がともに学び、情報を交換し、議論することができる当スクールのような場が強く求められていることを今回もうかがえました。

今回のサマースクールを一つの契機として、受講者が、お互いに親密なネットワークを形成し、今後も情報交換を重ねながら同志を増やしつつ、それぞれの地域で議会の活性化や地域の振興などに取り組んでいかれることを期待しています。

（公共政策学教育部・公共政策学連携研究部）

北方生物圏フィールド科学センターで 「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」 を開催

7月26日(土)～8月17日(日)に、札幌キャンパス、白尻水産実験所、及び忍路臨海実験所において、「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」を開催しました。

本事業は、小学校5・6年生、中学生、高校生を対象として、科学研究費助成事業の研究成果をもとに、最先端の研究成果について直に見て、聞いて、触れることで、科学のおもしろさを感じてもらおうプログラムとして、独立行政法人日本学術振興会からの支援を受けて実施しています。

以下に今回実施された4件のプログラムを紹介します。

(北方生物圏フィールド科学センター)

体験！ベリー研究の最前線 “君も育種家になろう！”

7月26日(土)に「体験！ベリー研究の最前線 “君も育種家になろう！”」を開催しました。これは、科学研究費補助金「基盤研究(C)：胚乳の植物体再生系を利用した新規倍数性育種法の開発」、「基盤研究(B)：ユーラシア・北米のハスカップ野生遺伝資源の多様性解析と評価に関する研究」、「若手研究(B)：胚乳由来の3倍体育成法の確立とインプリント遺伝子の解析による胚乳分化機構の解明」(以上、研究代表者：星野洋一郎准教授)による成果をもとに、体験的なプログラムで大学の最先端の科学に触れてもらう企画です。今年度で6回目の開催となりました。

中学生を対象に募集し、本州からの応募も含め、19名の参加がありました。当日は、雨模様に加えてPM2.5に関する注意喚起が出されていたため、生物生産研究農場での活動を中止し、室内のみのプログラムに変更して実施しました。開講式のあと、さまざまなベリーをクイズ形式で紹介し、ベリーについての知識を深めました。その後、北大農場産のハスカップ・ラズベリー・カシス・シーベリー・カーラントなど、多様なベリーの食べ比べを行

い、その違いを体験しました。シーベリーの果実は珍しさもあって特に関心を引いたようです。参加者はそれぞれお気に入りのベリーを見つけていました。

午後からはグループごとに3つ実験を行いました。テーマは「生きた花粉が伸びる様子をとらえよう」、「果実の糖度とpHを測ってみよう」、「パラフィン紙で交配袋を作ろう」です。ローテーションで全員が全ての実験を体験しました。

実験終了後は、クッキータイム(おやつ)の時間で、スタッフ手作りのラズベリーソース、ハスカップソースでアイスクリームを楽しみました。すっかりスタッフとも打ち解け、ベリーづくしの一日を振り返りました。最後に「未来博士号」の授与式を行い、閉講となりました。皆様、お疲れ様でした。

本事業の開催には入念な準備を行いました。細やかに各受講生と連絡を取るなど準備段階から支えてくれた事務職員の皆さん、圃場の管理などにご協力いただいた技術職員の皆さん、研究室の学生諸氏のご協力に深く感謝いたします。



さまざまなベリーの食べ比べ



花粉管が伸びる様子を顕微鏡で観察



果実の糖度とpHを測定

のぞいてみよう海の底，北海道の魚たちをまるごとリサーチ

白尻水産実験所（函館市白尻町）では、8月2日（土）・3日（日）に「のぞいてみよう海の底，北海道の魚たちをまるごとリサーチ」を開催しました。これは、科学研究費補助金「親潮流路にある島嶼生物の側所的進化と適応放散－極東域生物相形成史の解明を目指して」（研究代表者：宗原弘幸准教授）の成果によるものです。遠くは神奈川県、旭川市から訪れた高校生・中学生・小学生13名が未来の北大生として参加し、大学で行う実習さながらに野外観察、標本採集、室内実験に取り組みました。

最初に、白尻実験所前浜の生物相の特徴とよく見られる生物の生態について、「北大元気プロジェクト2012」で作成した『白尻 海の生き物図鑑』などを使い説明しました。その知識を実践するために、まずは、実験所にある大きな水槽をプールに仕立てて正しいシュノーケリング技術を練習しました。シュノーケルクリアとフィンワークをマスターして、いよいよ海中観察です。白尻はマコンプの海です。学生たちの解説を聞きながら、コンプの海中林と魚の群れなどの生物観察をしました。今年は水温が高く晴天の日に当たり、2日間で3時間、磯場の生物多

様性を体感することができました。

海面からの観察以外に、地曳き網で磯魚を集め、それらの種名を調べた後、DNAを確認する実験にも挑みました。遺伝子実験は、かなり高度な内容で、翌日まで続く実験でしたが、参加者は指導に当たった大学院生・学部生たちと楽しく会話をしながら、全員がやり遂げ、実験の楽しさも味わうことができました。

1日目の夕食前には、参加者へのサプライズとして、知られざる白尻の味覚の王者、クロマグロ（市場名：ホンマグロ）を材料としたまるごとリサーチをしました。クロマグロは、流線型のボディーと背鰭や胸鰭を収納できる構造、冷たい海に適應するための腹部の厚い脂肪が特徴です。細長い体や頭部にトゲがある磯魚たちとの違いを確認して、生息する場所に適應した体の構造の違いを勉強しました。自分の手でマグロに触れる機会は、滅多にないことなので、参加者だけでなく、実験所の大学院生・学部生にとっても貴重な経験となりました。もちろん、味覚のリサーチもしました。

海で行うフィールドワークは、準備と安全管理が大変で、神経を使う作業でしたが、2日間は、参加者にとって

も学生たちにとっても楽しい一時でした。また、学生たちが子どもたちに教える過程は、自然や生命の尊さを再認識し、自動の実験機器で行われている化学反応の原理を確認するなど、学生生活を総括し、自分たちの研究意義を問い質す機会にもなりました。

このように、教わる側にも教える側にも、それぞれの目標に向かう確かなモチベーションとなり、本実習が無事終了しました。実習の夏が終わると、研究の秋となります。学生たちの成長が楽しみです。



学生とのミックスタイムを兼ねた浜辺での昼食



自分たちで採集してきた魚類標本の種査定実習



シュノーケリングでの水中観察

海の森の調査隊～おしよろの“こんぶ”を調べよう～

8月3日(日)に「海の森の調査隊～おしよろの“こんぶ”を調べよう～」を開催しました。これは、科学研究費補助金による研究「北太平洋西部沿岸におけるコンブ類の種多様性と其の由来の解明」(研究代表者：四ツ倉典滋准教授)の成果をもとに、大学で取り組んでいる研究の一端に触れてもらうという児童へ向けた体験型プログラムです。今回は小学5・6年生を対象に、忍路臨海実験所で実施しました。

当日は青空のもと地元の小樽市や札幌市、そして遠くは帯広市内の小学校に通う総勢10名の児童が朝早くから本学総合博物館とJR小樽駅に集まり、借上バスで実験所へ向かいました。児童たちは開講式で今日一日の目標を述べたあと、“北海道沿岸の多様なコンブ類と、それらがつくり出す海の森(海中林)”について講義を受け、スクリーンに映し出される北海道沿岸各地の美しい海中林の映像に目を輝かせていました。

次いで、児童たちは“海の森の調査隊”を結成して磯船に乗り込み、実験所前浜のコンブの生育環境や生育状況を調べました。水中カメラや箱メガネを通して目にする海中の様子は、講義のなかで紹介された豊かな海中林とは異なり、まさに海の中に現れる砂漠のようでした。この海の砂漠化のことを

磯焼けと呼びますが、児童たちはその違いに大いに驚くとともに、船に同乗する講師による磯焼けの説明に熱心に耳を傾けていました。

昼食後は、忍路に残る僅かなコンブの森の中に生育する海藻の多様性を調べるため、午前中に採集した海藻の同定作業と押葉標本づくりを行いました。コンブの森が“生命の拠り所”として機能することを実感した児童たちは、その後、環境変化によって失われつつある海中林を守るために自分たちに何ができるかを考え、意見を出し合いました。

最後に、実験所で進められている研究に関連して、所内の培養庫で保存されているコンブの培養株を児童一人ひとりが高分子ゲルに混ぜ込み、海中へ投げ入れる実習を行いました。この作業は昨年実施した同事業のなかでもプログラムに組み込みましたが、これにより児童たちにはコンブの森づくりを身近に感じてもらえたと思います。終了式で“未来博士号”を受け取る小学生の姿はたくましく、全員が一日の目標を達成したようでした。

本プログラムは主催関係者の強いチームワークのもとで実施されました。準備段階から惜しみない協力をいただいた教職員及び学生諸氏に感謝いたします。



コンブの森の中は!?



大きく育て!!



海藻採取



コンブの種をゲルに混ぜて

農地を改良する緑肥作物をみてみよう

8月17日(日)に「農地を改良する緑肥作物をみてみよう」を開催しました。これは「基盤研究(B)カバークロープの導入による省資源・温暖化ガス抑制型の有機栽培の確立」(研究代表者:荒木 肇教授)による研究成果をもとに、農業生産の研究に触れてもらおうと企画したもので、高校生を対象にして実施しました。昨年は北方生物圏フィールド科学センターと連携関係にある余市町で開催しましたが、本年は北大農場をフルに活用しようと考えて、本学で開講しました。受講生は8名希望がありましたが、2名が参加できず、6名での実施となりました。

開講式のあと、「多様な作物」と題して講義を30分行い、体験実験の予備知識になる事項を説明しました。講義では、①北大農場で栽培されている作物、②作物が地球表面の約30cmの農地で生産されていること、③緑肥(カバークロープ)を導入すると土中の土壤動物や微生物が増えて炭素が増え、特にマメ科を導入すると作物の必須元素の窒素が土壤中に増えることを紹介しました。

続いて、実習実験用のトマトハウスに行き、マメ科のヘアリーベッチやイネ科のエンバクを前作したトマトの生育(草丈・茎径・葉数)を調査し、果実を収穫しました。そうすると、緑肥を入れていない慣行(10aあたり窒素24kg施用)に比べ、ヘアリーベッチ前作区では肥料を1/3にしても慣行に近

いトマト生育量であることに驚きました。科学研究費の研究(ポット試験)でも、前作されたヘアリーベッチ内に存在する窒素の25~40%がトマトに吸収されるデータを紹介しました。さらに高校生はトマトの栄養診断のために葉を採集しました。

その後、北大農場で栽培されている緑肥や作物を観察しました。観察ポイントには看板が設置されていて、作物が紹介されていました。北海道ではヒマワリとヘアリーベッチの混播が普及しており、その圃場でヘアリーベッチの根を掘り上げて根粒を観察しました。ジャガイモの畑では実際にインカルーヂュを掘り上げて、芋の付き方を観察しました。また、加工トマトも収穫しました。圃場では地温を経時的に測定しており、そのデータロガーも観察しました。

昼食時には弁当とともに、収穫したトマト、焼きジャガイモや搾りたての牛乳(殺菌済み)も試食・試飲して、農場生産物の味を楽しみました。

午後はトマトの葉を利用した栄養診断と土壌分析を行いました。栄養診断では、葉柄の水抽出液の硝酸濃度を試験紙と小型光度計で測定しました。土壌分析では、8月上旬にヘアリーベッチをすき込み、畑表面に置床した圃場から土壌をあらかじめサンプリングして調整した試料で、高校生が硝酸態窒素の比色実験をして、土壌内の窒素状態を比較しました。ヘアリーベッチの

窒素供給効果は、処理後1か月で出現するので、定植後2か月以上経過していたトマトの葉の栄養診断では差異はみられませんでした。8月初旬にヘアリーベッチを施用した圃場の土では、高い窒素状態が結果として得られました。

フリーターキングでは「北大にきてみたい」との感想とともに、「進路に迷っている」との相談もあり、支援してくれた大学院生が「自分も大学在学中に志望が変わったので、あまり心配しないで」と助言をしていました。このような「先輩」との交流も高校生には必要だと実感しました。最後に、受講生に「未来博士号」を授与して終了しました。

今回の体験実験を通じて、大変「薄い」農地の環境を緑肥という「緑の下の資源植物」を活用して改良している一端を体験できたのではないかと思います。一方、開講日にあわせて作物や圃場準備をしましたが、それは農業作付け体系から必ずしも最適な処理とはいえません。今後は、作物とともに土壌を観察の対象にした企画も考える必要があると感じました。

開講にあたり、高校へのポスター送付、受講者の確認、5月からの圃場準備、圃場説明案内板の設置、ポスターパネルや実習資料作成等の準備がありました。担当してくれた事務職員・技術職員及び大学院生の短期支援員の皆様にお礼申し上げます。



トマトの生育調査



ジャガイモ掘り取り



土壌分析の実験

北大農場公開デー「ジャガイモ収穫&ポテトチップス作り」

北方生物圏フィールド科学センター生物生産研究農場では、8月11日（月）に桑園地区の小学生と保護者を対象に農場公開を開催しました。

生物生産研究農場は「生産から食品加工まで」の一貫教育を運営の基本にしており、トマトやリング等を加工する農産製造と、豚、鶏や牛乳を加工する畜産製造について、それぞれ原料の生産から加工までの一連の流れを通して学生実習や研究が行われています。今年の農場公開は地域の親子を対象に、食育教育の一環としてジャガイモの収穫とポテトチップス作りの体験実習を実施しました。

収穫の前に担当職員によるジャガイモに関するミニ講義を行いました。ジャガイモの歴史や名称の由来から始まって、ジャガイモでは茎、サツマイモでは根の部分をそれぞれ食べることを実物を見せて説明しました。また、片栗粉の原料でもあるジャガイモのでんぷんは、低温で貯蔵すると糖に変わってエネルギーとなるが、この糖がポテトチップスにした時に焦げの原因になることも紹介しました。

その後、圃場に出てスコップを使ってジャガイモを収穫しました。北大農場で毎年生産している男爵薯、キタアカリ、とうやの3品種を掘ってもらいました。台風11号の影響で前日夜から当日明け方にかけて大雨が降り、ジャガイモ収穫の実施が危ぶまれましたが、朝には晴れて実施することができました。ただ、大雨の影響で重く湿った土に参加者は悪戦苦闘した様子でした。

収穫後は身支度と手洗いを済ませて農産製造室にてポテトチップスの製造に入りました。製造の手順はまずジャガイモを洗った後、皮むき機で皮をむき、スライサーで薄く切ります。表面のでんぷんを流すために軽く水洗いしてから180℃の油で揚げます。水蒸気が出なくなったら取り出して塩を少々振って完成です。参加者は親子で分担したり協力したりして3品種のジャガイモのポテトチップス作りに取り組みました。ポテトチップス用の品種ではありませんでしたが、収穫直後にチップスにしたことで焦げることなくきれいに揚がったようでした。

完成後は試食を行いました。自分が掘ったジャガイモを自分でポテトチップスにしたことで味も格別だったと思います。また、糖の含量が高いジャガイモをチップスにしたらどうなるかを知ってもらうために、低温貯蔵で糖の含量を高めて市販されているジャガイモをチップスにして、参加者に焦げたポテトチップスを試食してもらいました。

過去3年の農場公開は畜産分野をテーマに開催しましたが、今回は作物分野をテーマに企画しました。ジャガイモについて深く知ることができる良い機会になったことと思います。ポテトチップスは家庭でも簡単に作れますが、機械で作ったので良い体験ができたという感想もいただきました。余ったジャガイモは持ち帰っていただいたので、家庭でも色々な料理で3品種のジャガイモを食べ比べてほしいと思います。

（北方生物圏フィールド科学センター）



ジャガイモの収穫



ポテトチップス作り

法学研究科・附属高等法政教育研究センター公開講座 「なぜ憲法改正なのか？」が終了



開講式の様子（7月24日）

法学研究科及び附属高等法政教育研究センターでは、7月24日から8月21日までの毎週木曜日（8月14日を除く）、全4回にわたって、公開講座「なぜ憲法改正なのか？」を開講しました。

多くの人が関心を持ちながらも、なぜか議論の場が少ない憲法改正問題。このテーマに正面から取り組んだ本講座には、受付開始前から問い合わせが寄せられるなど、学内外の反響も大きく、当初予定定員50名を大きく上回る94名の受講者を得ての開催となりました。

全4回の講座では「憲法改正につい

て市民とともに多角的に考える機会をもとう」という主旨のもと、憲法学、政治学、比較法、国際政治等を専門とする講師陣から、それぞれの視点から見た憲法改正についての講義が行われました。

講義では、憲法の意味や立憲主義の解説に始まり、戦後民主政治の動き、変質する日本社会と政治の行方、国際社会から見た9条と日米安保との関係などが語られ、憲法改正問題を通して浮き彫りになる「日本が抱える課題」に受講者からも活発な質問や意見が出されました。

受講者は60～70代を中心に、20代か



質疑応答（講師は遠藤教授）

ら80代までで、例年に比べ若い世代や初参加の方が目立ちました。また、全回出席された受講者67名の中には、札幌まで片道3時間以上かけて通われた方も見られるなど、多くの受講者が意欲的に参加されている様子がうかがえました。

講義後の質疑応答の時間には、毎回多くの受講者が手を挙げ、それぞれの立場から率直な意見や疑問を投げかける光景が繰り返されました。この問題への市民の関心の高さを実感するとともに、大学が地域社会において果たすべき責任と役割を再確認した講座となりました。

最終講義の終了後には閉講式が行われ、亘理 格法学研究科長から所定の回数（3回以上）を受講した89名に修了証書が授与されました。

（法学研究科・法学部）

「なぜ憲法改正なのか？」

第1回 7月24日（木）

「立憲主義・憲法・憲法改正—憲法改正問題を考える際のポイント—」

法学研究科教授 佐々木 雅寿

第2回 7月31日（木）

「民意による政治の意義と限界—なぜデモクラシーと立憲主義が結び付くのか」

法政大学法学部教授、本学名誉教授 山口 二郎

第3回 8月7日（木）

「自民党草案の反立憲主義的性格について—中国憲法との比較の視点から」

法学研究科附属高等法政教育研究センター長・教授 鈴木 賢

第4回 8月21日（木）

「憲法9条は日本の安全を保障するか」

法学研究科・公共政策大学院教授 遠藤 乾

情報法政策学研究センターでサマーセミナー「最新の知的財産訴訟における実務的課題—特許法をめぐって—」を開催

情報法政策学研究センターでは、8月16日（土）から19日（火）までの4日間、人文・社会科学総合教育研究棟において、サマーセミナー「最新の知的財産訴訟における実務的課題—特許法をめぐって—」を開催しました。

本セミナーは、本センターが日本弁理士会から弁理士の継続研修のための外部研修機関としての認定を受けて、平成21年度から毎年度開催しているものです。受講者は、知的財産事件に携わる実務家（弁理士、弁護士、企業の知的財産部員等）ばかりでなく、大学の教員及び大学院生など幅広い分野にわたり140名を超えました。

第6回目となる本年度は、本センターの兼務教員の田村善之教授、吉田

広志教授、外部招聘講師の飯村敏明元知的財産高等裁判所判事が、特許法に関する実務的課題について、数々の重要裁判例を踏まえてわかりやすく講義を行いました。受講者は熱心に受講されるとともに、講義の最後の質疑応答では現実に即した様々な質問をし、各講師は丁寧に答えていました。

本セミナーの初日終了後、早速一部のブログやツイッターで受講者から研修中の模様や講義を受けた感想が投稿されており、本年度のサマーセミナーも多く温かい反響をいただいた中で盛会裡に終了しました。

（情報法政策学研究センター）



講義を行う飯村元判事



講義2日目の様子

北海道大学病院で第1回地域連携懇話会を開催

北海道大学病院は、8月29日（金）午後3時からロイトン札幌「リージェントホール」において、第1回北海道大学病院地域連携懇話会を開催しました。本懇話会は、本院と関連の深い地域医療機関の関係者に本院の地域連携の紹介と取り組みを報告し、「顔の見える連携」を実施することを目的として企画しました。

はじめに寶金清博病院長の挨拶の後、渥美達也地域医療連携福祉センター長から、同センターにおける地域連携の取り組みについて詳細な紹介がありました。引き続き、白土博樹陽子線治療センター長から、先進医療で行われている「陽子線治療」、秋田弘

俊腫瘍内科長から「がんの集学的治療」、北川善政口腔内科長から「外来新棟 歯科診療センターの紹介」、生駒一憲リハビリテーション科長から「高次脳機能障害と地域連携」について、個々に詳細な紹介がありました。最後に特別講演として、北海道医師会長の長瀬清氏から「北海道の地域医療について」と題して、医療制度の変遷と地域医療の機能分化の必要性について、講演がありました。

当日は149名（学外88名・学内61名）の参加者があり、大盛会のうちに本懇話会を終了しました。

（北海道大学病院）



寶金病院長の挨拶



懇話会の様子

医学研究科・医学部で第27回教育ワークショップを開催



集合写真

医学研究科・医学部では、8月15日（金）・16日（土）の2日間にわたって、北広島市の札幌北広島クラッセホテルを会場に、第27回医学研究科・医学部教育ワークショップを開催し、笠原正典研究科長をはじめとする教員36名と医学系事務部の職員1名が、1泊2日の合宿研修を行いました。医学研究科・医学部では、教育関係の定例研修企画（いわゆるFD）を年に4回実施しており、その一つであるこの合宿形式の教育ワークショップでは、教育活動に関する種々の具体的な課題をテーマとして検討しています。今回のテーマは「英語教育と国際化」でした。

初日の朝、大学でバスに乗り込んだ参加者は、車内で自己紹介とグループワークの練習（4グループに分かれて各グループの名前を考える）をしながら会場に向かいました。会場に到着

後、笠原研究科長による趣旨説明とオリエンテーションを行い、その後ワークショップ形式による研修を開始しました。まず、呼吸器内科学分野の西村正治教授から、今回のテーマに関する現状と問題点について講演があり、次に、昼食をはさんで夕方まで、ニーズ分析と、それをふまえた具体的なカリキュラム開発やプロジェクトの企画についてグループワークと全体討論を行いました。全体討論では、個人間の能力や動機づけの差が大きいという英語教育の特徴をふまえて、正規の授業以外の学習機会を充実させることの重要性の指摘があり、卒前教育における英語教育と留学支援制度の間の連携を図ることや、日本人の大学院生に学位論文の成果発表を英語でまとめるよう促す機会を増やすことなど、今後に向けた具体的な方策の提案がありました。

夕食後は、「定期試験は全廃するべ

きである」をテーマに、恒例となっているディベート方式による議論を皆で楽しく体験しました。

2日目は、まず、前日の議論を振り返り、次に、消化器内科学分野の坂本直哉教授から医学生の能動的学習を促進するための教育方法として知られる「問題解決型学習（PBL: Problem-based learning）」について、その理念や具体的なカリキュラムを紹介する講演があり、その後全体討論を行いました。最後に吉岡充弘副研究科長から講評があり、笠原研究科長から参加者に修了証が授与され、閉会しました。

このワークショップの成果が実際の教育の改善につながることを願うとともに、参加者や支援していただいた皆様に感謝申し上げます。

（医学研究科・医学部）

薬学研究院が「第4回薬学研究院研究発表会」を開催

8月1日(金)、臨床薬学講義室において、「第4回薬学研究院研究発表会」を開催しました。本発表会は発表者のプレゼンテーション能力の向上や発表者の研究内容を他の教員が理解することを趣旨として企画され、今回で第4回目の開催となります。

発表会は、南 雅文薬学研究院長による開会の挨拶で始まり、次いで「修飾ヌクレオシドを用いた機能性核酸の創製」(薬化学研究室・佐藤浩助教)、「RNA結合タンパク質FUSによるALS発症機構の解明」(神経科学

研究室・中矢 正助教)、「遷移金属錯体を利用した有機合成～新反応の開発と有用化合物の合成～」(精密合成化学研究室・齋藤 望准教授)の3件の研究発表が行われました。

本発表会には教員48名が参加しました。これまでに3回の発表会を行ってきたこともあり、発表者が分野の異なる教員に対して分かりやすく伝えるための十分な配慮が浸透していました。各発表者の工夫も参考とされ、さらに、他研究領域との連携の可能性を探るより良い機会となり、定着したイベ

ントになりつつあります。次回は来春に開催する予定です。

(薬学研究院・薬学部)



発表者の説明を熱心に聞く参加者



発表する佐藤助教



発表する中矢助教



発表する齋藤准教授

■お知らせ

医療費通知事業の実施

国家公務員共済組合法附則第14条の3第1項に基づく国家公務員共済組合連合会の共同事業の一つとして、昭和56年度から実施している医療費の通知事業を今年も行うことになりました。

この通知事業は、組合員に対し医療費の額等を通知することにより、組合員等に健康に対する認識を深めていただき、ひいては、短期給付事業の健全な運営に資することを目的として、特定月における支払分について通知するものです。

実施内容は次のとおりです。

1 通知の対象

組合員及びその被扶養者に係る平成26年6月診療分の診療報酬明細書（レセプト）による医療費の額等です。

なお、共済組合の直営医療機関並びに契約医療機関に係る請求分、任意継続組合員等郵送が必要な請求分、特定の診療部門に係る請求分は通知の対象から除外されます。

2 通知の内容

通知の内容は、受診者名、診療年月、診療日数、入院・通院・歯科・薬局の別、医療費の額及び病院名です。

3 通知票の組合員への配布

通知票の組合員への配布は、平成26年11月末日までに各部局等の共済事務担当係から行われる予定です。

(文部科学省共済組合北海道大学支部)

レクリエーション

学内教職員ソフトボール大会の開催

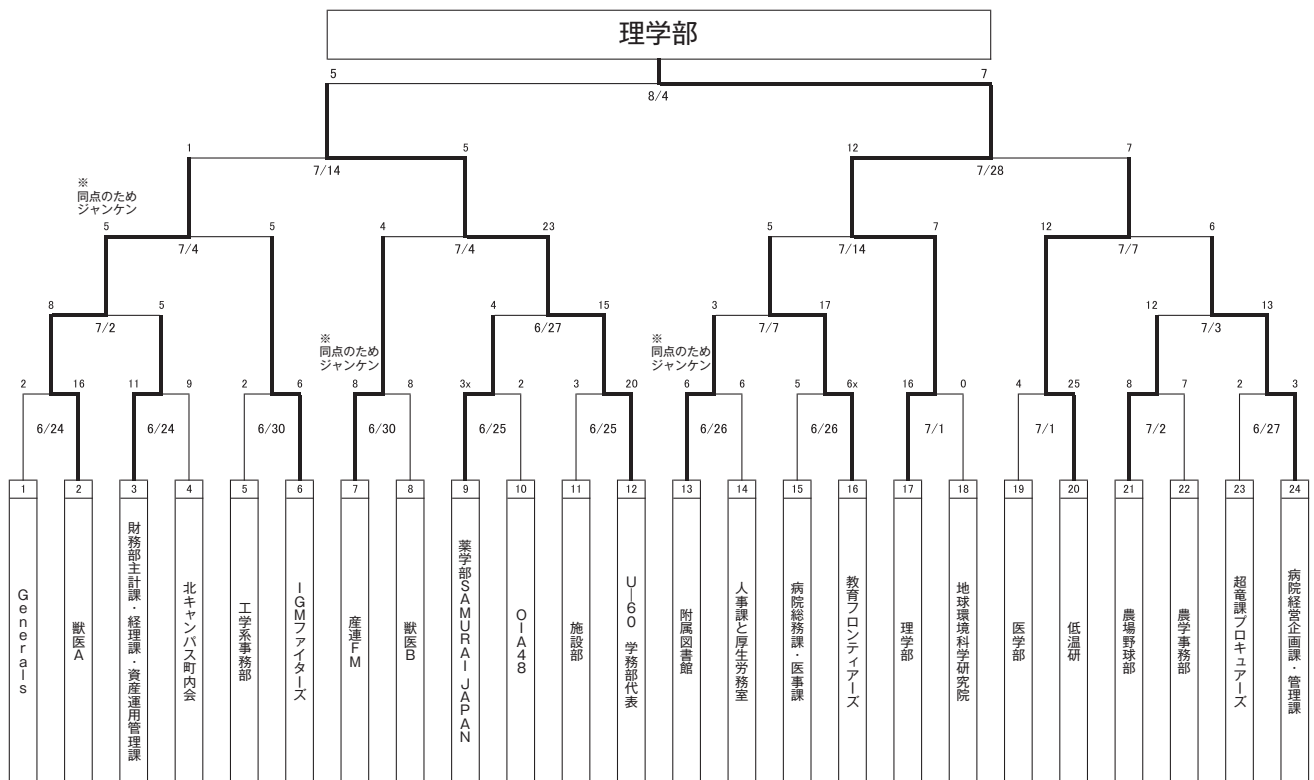
学内教職員ソフトボール大会を、6月24日（火）から8月4日（月）の約1ヶ月半にわたり、本学B球場で開催しました。

参加24チーム・約400名の選手により、連日熱戦が繰り広げられました。選手のみならず、応援の方々のたくさんの歓声があふれる中、昨年度の大会では準優勝に終わった「理学部」チームが見事に雪辱を果たし、栄冠を勝ち取りました。

なお、対戦結果は以下のとおりです。

（全北大野球部，Re-birth）

平成26年 学内ソフトボール大会トーナメント表



優勝した「理学部」チーム

■ 学内規程

北海道大学通則の一部を改正する規程

(平成26年8月25日海大達第174号)

本年2月28日付けで締結された「北海道地区国立大学における教養教育の単位互換に関する協定書」に基づき、平成26年度第2学期から、本学において、北海道地区の他の国立大学の学生を特別聴講学生として許可することができることとするに伴い、所要の改正を行うものです。

国立大学法人北海道大学高等教育推進機構規程の一部を改正する規程

(平成26年8月25日海大達第175号)

本年2月28日付けで締結された「北海道地区国立大学における教養教育の単位互換に関する協定書」に基づき、平成26年度第2学期から、高等教育推進機構において、北海道地区の他の国立大学の学生を特別聴講学生として許可することができることとすること並びにオープンエデュケーションセンター長、オープンエデュケーションセンター副センター長、自然科学実験支援室長及びアカデミック・サポートセンター長の任期の末日を高等教育推進機構長となる副学長の任期の末日以前とすることに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行うものです。

北海道大学における特別聴講学生及び特別研究学生に係る授業料等の不徴収に関する規程の一部を改正する規程

(平成26年8月25日海大達第176号)

北海道大学通則の一部が改正されることに伴い、所要の改正を行うものです。

国立大学法人北海道大学病原体等安全管理規程の一部を改正する規程

(平成26年8月25日海大達第177号)

感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律施行令の一部を改正する政令（平成26年政令第257号）が、平成26年7月16日に公布され、同年7月26日から施行されたことに伴い、所要の改正を行うものです。

■ 研修

平成26年度国立大学法人北海道大学事務職員英語研修（グローバル化対応）

開催期間：平成26年 8月 7日～平成26年 8月 8日

開催場所：学術交流会館第3会議室

研修目的：大学の教育環境のグローバル化に対応するため、外国人教員及び留学生へのサポート並びに海外連携大学担当者との業務上の十分な対応が行える職員として、高度で実践的な英会話運用能力を身につけさせ、職員の能力向上を推進することを目的とする。



受講風景

(総務企画部人事課)

平成26年度法人文書管理・個人情報保護・情報公開に関する研修会

開催期間：平成26年 8月 8日

開催場所：事務局大会議室

研修目的：法人文書管理・個人情報保護・情報公開に関する事務を担当する事務職員に対して、必要な基礎知識を習得させるとともに、各職員の意識及びスキルの向上に資することを目的とする。



文部科学省大臣官房総務課総務班主査・
文書情報管理室長補佐・個人情報保護専門官・
情報開示官 関崎徳彦氏による講義

(総務企画部総務課)

■表敬訪問

海外

年月日	来訪者	来訪目的
26.8.7	ハルビン工業大学（中国）エネルギー科学及び工業学院 淡 和平 教授	本学工学研究院訪問
26.8.26	忠北大学校（韓国）Doo Hyun Kim 工学部長	ジョイントシンポジウム参加



ハルビン工業大学エネルギー科学及び工業学院
淡 和平 教授（前列右）



忠北大学校 Doo Hyun Kim 工学部長（前列左）

（国際本部国際連携課）

■人事

平成26年8月15日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【技術職員等】 (辞職)	棚木原 智 美	北海道大学病院看護部看護師

平成26年8月31日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【助教】 (任期満了) (辞職)	増 潤 隆 史 喜 多 俊 行	大学院文学研究科助教 遺伝子病制御研究所助教
【技術職員等】 (辞職)	山 口 はるみ 吉 田 鈴	北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師
【嘱託職員】 (辞職)	堀 田 文 雄	財務部調達課

平成26年9月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【教授】 大学院水産科学研究院教授 大学院工学研究院教授 大学院公共政策学連携研究部附属公共政策学研究センター教授	高 木 力 飯 場 正 紀 西 村 淳	採用 採用 厚生労働省大臣官房付
【准教授】 (転出) 浜松医科大学准教授	黒 野 暢 仁	大学院工学研究院助教
【講師】 大学院獣医学研究科講師	大 田 寛	大学院獣医学研究科助教
【助教】 北海道大学病院助教	氏 家 英 之	採用
【技術職員等】 北海道大学病院看護部看護師	幡 野 智 子	採用

新任教授紹介

平成26年9月1日付



水産科学研究院教授に

たかぎ つとむ
高木 力 氏

海洋生物資源科学部門
水産工学分野

生年月日

昭和40年9月14日

最終学歴

北海道大学大学院水産学研究科博士課程修了(平成8年3月)
博士(水産学)(北海道大学)

専門分野

水産物理学, 魚類行動学, バイオメカニクス



工学研究院教授に

いしば まさのり
飯場 正紀 氏

空間性能システム部門
建築システム分野

生年月日

昭和30年1月1日

最終学歴

名古屋大学大学院工学研究科博士後期課程単位取得退学(昭和57年3月)
博士(工学)(名古屋大学)

専門分野

耐震工学



公共政策学連携研究部
附属公共政策学研究センター教授に

にしむら じゅん
西村 淳 氏

エコ・ウェルフェア部門

生年月日

昭和39年3月26日

最終学歴

早稲田大学大学院法学研究科博士後期課程修了(平成25年7月)
博士(法学)(早稲田大学)

専門分野

社会保障法

訃報

名誉教授 石川 武氏
いしかわ たけし
(享年86歳)



名誉教授 石川 武氏は、平成26年8月5日にご逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

先生は、昭和2年11月29日に室蘭で生まれ、同27年3月北海道大学文学部史学科を卒業後、北海道大学文学部助手を経て、昭和31年5月北海道大学法学部助教授に就任、さらに昭和37年6月北海道大学法学部教授に昇任されま

した。それ以降、平成3年3月に停年退官されるまで、西洋法史の教育と研究に従事されたほか、評議員、法学部長として大講座制への移行などの学部改組に主導的な役割を果たされ、加えて昭和62年5月から平成3年3月まで学生部長として学生の厚生補導にも力を注がれました。その後は、平成3年12月から平成9年6月まで拓殖大学北海道短期大学学長を務められました。

先生は、西洋中世初期の国制における自由と支配の研究に力を入れられ、いわゆる国王自由人学説にその史料的基盤にまでさかのぼった検討を加えることを通じて、中世初期国制像の根本的な見直しが必要であることを明らかにされました。また先生は、中世ドイツの法書の性格と構造に関する研究に精力を傾けられ、13世紀前半に北ドイツで成立した中世ドイツの代表的法書

であるザクセンシュピーゲル中の用語と同書の内在的論理を徹底的に分析して、その性格と規範構造を浮き彫りにされました。とりわけザクセンシュピーゲルに関する先生の研究成果はドイツの学界でも高い評価を受けています。そのほか、先生は共同研究のオルガナイザーとしても卓越した能力を発揮され、さらに日本・ドイツ間の国際交流にも尽力されました。こうした活動に対して平成10年12月にはベルリン自由大学から名誉博士号を授与され、また教育・研究上の多大な貢献により平成19年4月には瑞宝中綬章を受章されました。

ここに謹んで先生のご冥福を衷心よりお祈り申し上げます。

(法学研究科・法学部)

編集メモ

●朝晩の空気が肌寒く感じられるようになり，日ごとに秋めいてきました。キャンパス内の木々も色づき始めています。

●9月16日（火）に，インフォメーションセンターの来館者が100万人に達しました。日頃の皆様のご利用に感謝申し上げます。これからも多くの皆様に親しまれ，末永くご利用いただけるセンターを目指していきます。





2007. 9. 23 函館本線 余市～仁木（余市町・仁木町）

北の鉄道風景 18 蒸留所のある街

今月末から放送開始予定のNHK連続テレビ小説「マッサン」は、ニッカウキスキー創業者の竹鶴政孝とその妻リタを主人公とした作品である。スコットランドでウイスキーの製造技術を習得した竹鶴は、寿屋（現在のサントリー）での10年間の勤務を経て、余市町に蒸留所を創設し、彼自身が理想とするウイスキー造りに情熱を注いだ。写真は余市町と仁木町の町境付近にある頂白山から俯瞰した余市の

街である。写真の左上、蛇行する余市川のほとりに見える赤い屋根の建物群が、竹鶴が興したニッカウキスキーの余市蒸留所だ。この蒸留所のすぐ側にJR余市駅があり、そこを発車した観光列車「SLニセコ号」が黄金色の田園地帯を駆け抜けてゆく。

情報科学研究科 准教授 山本 学

北大時報 ⑨ No.726 平成26年9月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL：(011) 706-2610 / FAX：(011) 706-2092 / E-mail：kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。http://www.hokudai.ac.jp/pr/publications/jihou.html